

高崎健康福祉大学看護学科学学生海外研修報告

—— インドネシア STIKES 大学との学生・学術交流協定 (MOU) の成果として ——

李 孟蓉・角野善司・川田智美
風間順子・芝山江美子

(受理日 2012年9月3日, 受稿日 2012年12月13日)

Takasaki University of Health and Welfare Nursing Students Overseas Training Report

—— Achievement of the Students Exchange and Academic Exchange
Agreement (MOU) with STIKES University in Indonesia ——

Moyo LEE・Zenji SUMINO・Tomomi KAWATA

Junko KAZAMA・Emiko SHIBAYAMA

(Received Sept. 3, 2012, Accepted Dec. 13, 2012)

要 旨

2012年3月18日～24日の日程で、インドネシア私立 STIKES A. YANI 大学との締結後に第1回看護学科学学生海外研修を実施した。参加学生と教員合わせて16名であった。施設視察は、大学2か所、保健所2か所、保健センター1か所、病院2施設、合計7施設であった。研修終了後学生は今回の研修内容については約8割が満足していると回答していた。また、参加した学生全員が国際看護への関心度が深まったと回答していた。

Abstract

The first Nursing student overseas training was held after the MOU with the STIKES A. YANI University in Jakarta, Jogjakarta, in Indonesia, March 18-24th, 2012. There were 16 participants in all, including 14 students and 2 faculty teachers. Visits were made to a total of seven facilities: two hospitals, and three health center, and two Universities. The respondents about this training in general and training contents, that approximately 80% of the students were satisfied. All participated students have deepened to the level of interested in international nursing.

I. はじめに

高崎健康福祉大学（以下：本大学）の教育理念には「国際的視野を兼ね備えた人材を育成する」を掲げており、看護学部は2007年の開設時より国際交流委員会を発足させ、インドネシア共和国ジョグジャカルタ市にある私立 SEKOLAH TINGGI ILMU KESEHATAN JENDERAL AHMAD YANI YOGYAKARTA (STIKES A. YANI 以下：STIKES 大学) に、当看護学科教員による2度の視察(2006年度、2007年度)、STIKES 大学の教員の視察の受け入れ(2008年度)、看護学科学生のインドネシア研修(2009年度)の実施を積み重ねてきた。両大学は学長の理解や看護学科の教員の協力を得ながら5年間の交流を重ねた結果、2011年10月12日に正式に大学間の学生・学術交流協定(MEMORANDUM OF UNDERSTANDING: MOU) を締結することができた。

今回は STIKES 大学との正式な MOU 締結後に、2012年3月18日～24日まで7日間の日程で STIKES 大学、およびインドネシア共和国ジャカルタ市にある国立 University of Indonesia (以下；UI) に海外研修を実施した。当看護学科は長年に渡り STIKES 大学との交流実績があるため、日本学生支援機構の(補助全15名)補助金の支援を受けることができた。支援を受けた学生は、1年生7名、2年生5名、3年生2名の合計14名であり、参加者は引率教員2名を含めて計16名であった。本稿では、看護学科の学生インドネシア研修の概要、および学生に対して帰国後行ったアンケート調査の結果を中心に報告する。

II. インドネシア研修の概要

本研修は、MOU 締結後に当たり以下にある6つを研修目標とし、研修要項を作成した。

1. インドネシアの同年代の看護学生と共に学び、学生同士の交流と理解を深める。
2. インドネシアの看護教育の特徴を学び、日本の看護教育との違いを考察する。
3. インドネシアの看護と日本の看護の違いを、それぞれの社会背景を加味し、学生の立場で考えることができる。
4. 日本では学習機会の少ない熱帯地方特有のコレラや細菌性赤痢、開発途上国の PHC (Primary Health Care)、自然災害およびそれらにおける看護の役割を考えることができる。
5. イスラム文化に触れることによって異文化を理解する姿勢を身につけ、お互いの価値観を尊重した看護を実施するための姿勢を身につけることができる。
6. 英語を母国語としない人々とのコミュニケーション方法を身につける。

研修内容は、研修目標に沿って STIKES 大学や UI に提示し、研修目標に沿った病院や施設をメールのやり取りで検討した。その結果、ジャカルタにある UI の看護学生との交流や保健所支所、保健センター、ジャカルタイスラム病院の施設視察、並びに締結を結んだジョグジャカルタにある STIKES 大学の看護学生との交流や、保健センター、国立病院の視察を行った(表1)。

表1 インドネシア研修プログラム

日程	研修内容
3月18日 (日)	成田空港出発、ジャカルタへ インドネシアジャカルタ空港到着

3月19日 (月)	ジャカルタ市保健所支所・保健センター視察、 質疑応答 UI 施設見学 ◇学生とのディスカッション・交流
3月20日 (火)	Islamic Hospital 視察、質疑応答 ジョグジャカルタ空港へ
3月21日 (水)	STIKES 大学視察 ◇学生とのディスカッション・交流、世界 文化遺産（ポロブドゥール）視察
3月22日 (木)	ジョグジャカルタ保健所視察、Panembahan Senopati Bantul 病院視察、各施設の質疑応答 パティック製造工場視察
3月23日 (金)	ジャカルタ市内観光（国立博物館、モスク、 ショッピングセンター）、夜ジャカルタ空港出 発
3月24日 (土)	午前成田空港到着

1. 視察した施設の概要は以下の通りである。

1) ジャカルタにある施設

①保健所支所（Posyandu Kepodang）

インドネシアでは近年高血圧の罹患率が高く、医療従事者より指導を受けたボランティアが高血圧についての健康教育を実施している。また、看護大学院生が高血圧に効果があるリラクゼーション方法を地域住民に指導している場面を、視察した。



写真1 保健所支所での高血圧の健康教育の見学

②保健センター

(Puskesmas Kelurahan Tugu)

当保健センターには入院設備はないが、医

師や看護師、助産師、栄養士、薬剤師がおり、薬の処方まで行っているため、日本でいうクリニックや診療所に近い施設である。



写真2 保健センターのエントランス

③ジャカルタイスラム病院

(RUMAH SAKIT ISLAM JAKARTA)

ジャカルタイスラム病院のベッド数411床、外来患者は1日に約600名、ベッドの稼働率は70～80%である。入院患者の多くはイスラム教徒（ムスリム）であるが、イスラム教徒以外の患者も1割くらい入院している。また勤務者はほとんどイスラム教徒である。病院内にはモスクがあり、入院患者が礼拝できるように配慮して作られている。入院している患者の疾患としては、心疾患や高血圧、



写真3 ジャカルタイスラム病院の外観

がん、感染症では結核、デング熱、赤痢が多い。

2) ジョグジャカルタにある施設

①保健センター

(Pajangan Community Health Center)

当保健センターは医師、看護師、助産師、検査技師、栄養士等の医療職種や会計を含めて、42名のスタッフが配置されている。活動内容としては外来診察や、歯科診療、妊婦健診等を行っている。また、男女各1室の入院施設があり、病院と連携をしながら、保健センターで行えない検査は病院で実施し、地域住民の健康の維持・増進の役割を担っている。



写真4 保健センターで診察待ちしている住民

②病院

(Panembahan Sennopati Bantul Hospital)

当病院は、289床のベッド数、外来患者は1日に約500名、ベッドの稼働率は70～83%の国公立病院である。入院している患者の多くは、高血圧、糖尿病の疾患を抱えている。ジャカルタにある病院との視察を通して、インドネシアの医療保健問題は感染症のみならず、日本と同様に生活習慣病といわれる疾患が増えていることを知ることができた。



写真5 Panembahan Sennopati Bantul hospital

2. 学生との交流

1) UI

初めて英語で行うプレゼンテーションや、英語が堪能のUI学生とのコミュニケーションに



写真6 UIでのプレゼンテーション



写真7 UI学生との記念撮影

若干戸惑いの様子が見られたが、同じ看護を学ぶ学生として、日本伝統の折り紙を一緒に行う交流を通して、言葉の壁を感じさせないほど終始笑顔で交流することができた。



写真8 UIの研修終了証書の授与

2) STIKES 大学

UI 学生との交流経験を踏まえ、自ら英語を話そうとして、辞書を片手に相手に自分の伝えたいことを伝えようと努力している学生の姿があった。教員としては、僅か数日の間に積極的に関わろうとする学生の姿勢を見てとても嬉しくなり、学生の持つ可能性を最大限に引き出せるよう、今後の研修内容をより充実したものにしたいと思う。



写真9 STIKES 学生との交流の様子



写真10 STIKES 大学でのプレゼンテーション



写真11 STIKES 大学学生との記念撮影

3. 観光

1) ボロブドゥール遺跡：ジョグジャカルタ市

STIKES 大学学生と一緒にボロブドゥール遺跡の視察を行った。ボロブドゥールの歴史につ



写真12 ボロブドゥール遺跡での記念撮影

いてインドネシアの学生から説明を受けながら、道中の車の中で学生同士は終始笑顔で話していた。

2) インドネシア国立モスク：ジャカルタ市

インドネシア国立モスクはイスラム教徒の寺院である。その規模は、世界最大のムスリム人口を抱えるインドネシアに相応しく世界最大のモスクである。外観はドーム型になっており、その収容人数は12万人以上といわれている。内観からもその広さを肌で感じ取ることができ、またイスラム教徒が祈りをささげるまでの儀式を目の当たりにすることができた。



写真13 インドネシア国立モスクの内観

III. 研修に対する学生の評価

今回、学生インドネシア研修の実施に当たり、保護者への案内や、学生には年度初めに海外研修参加希望のアンケート調査を行った。アンケートの意向調査では、1～4年次生392名中回答者346名(88.3%)であり、「参加したい」は25名(7.2%) (1年生6名、2年生4名、3年生13名、4年生2名)、「条件により参加したい」133名(38.4%)であった。最終的な参加申込者は14名(1年生7名、2年生5名、3年生2名)であった。また、研修の実施に当たり、研修ガ

イダンスを3回実施し、参加する学生には事前学習課題を提示し、研修目標の明確化を促した。

帰国後にはアンケートを実施した。

1) 研修内容に対する評価 (図1)

今回の海外研修内容に対する満足度は、約8割の学生が「大変満足」、「満足」と回答していた(図1)。「やや不満」、「不満」と回答していた学生は、「施設の説明が早かった」、「もう少し質問をしたかった」、「もう少し街を歩きたかった」との記述回答があった。今回の研修のタイムスケジュールがやや過密であり、交通渋滞によって視察時間の制限があったことが理由として挙げられた。

2) 研修目標に対する評価 (図2)

6つの研修目標に対する評価では約8割の学生が「良くできた」、「できた」と回答していた。「良くできない」と回答した学生は、研修目標3と5のそれぞれに対して、「社会的背景の理解が不十分」、「異文化を理解し尊重した関わりは大切であるが、看護を実施するための姿勢をまだ身につけていない」との記述回答があった。今回の研修参加者は1年生が約半数を占めており、看護過程を展開し看護を実施する経験がまだ浅いため、看護を実施するための姿勢をまだ十分に身につけていないだと考える。また、研修目標4に挙げていた「日本では学習機会の少ない熱帯地方特有のコレラ等における看護の役割を考える」については、ほかの項目より達成度が低かった。これは、近年インドネシアにおける疾患構造の変化によって、地域差があることから研修施設での達成度が困難であった。また、最初は緊張していた学生たちは、日を追うごとに異国の環境・文化に親しむ様子がうかがえ、施設の説明に熱心に耳を傾け活発に質問をしていた。両大学での学生とはジェスチャーを交え

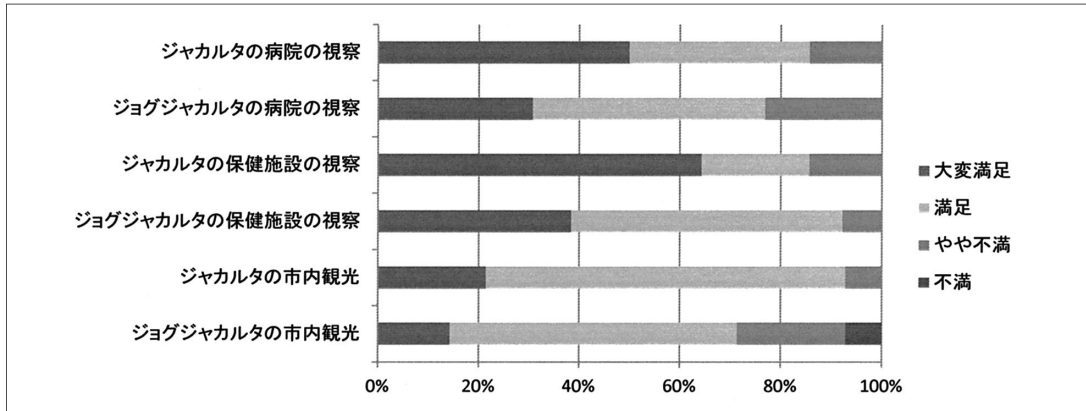


図1 研修内容に対する評価

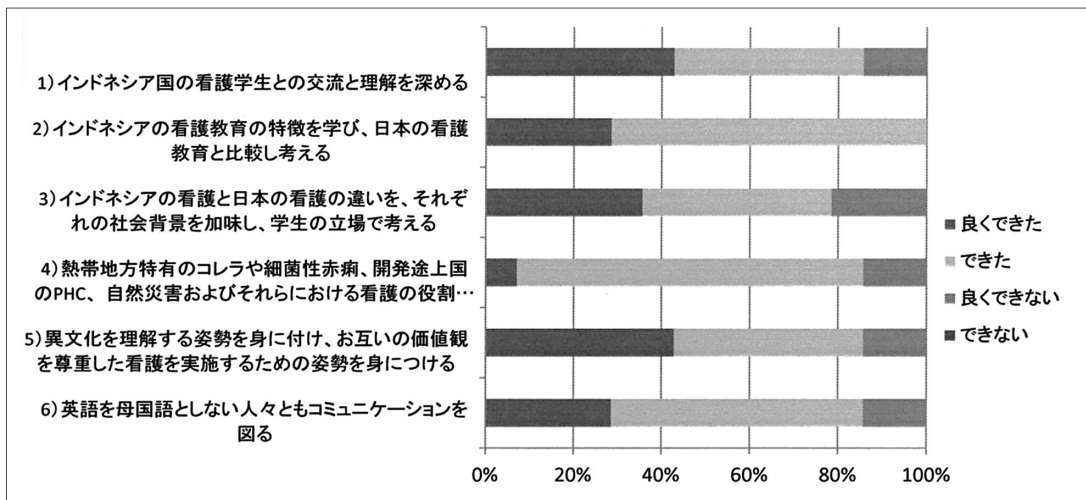


図2 研修目標に対する評価

ながら、辞書を片手に自ら英語でコミュニケーションを図る学生もいた。学生は折り紙やあやとりの日本伝統の遊び等の交流を通して、研修目標1「学生同士の交流と理解を深める」や研修目標6に挙げていた「英語を母国語としない人々とのコミュニケーション方法を身につける」点については達成できたものだと考える。さらに、大学の視察や学生同士でのプレゼンテーションを通して、互いが受けている看護教育について、研修目標2「看護教育の特徴や違い」を考察できたと考える。

そのほか、国際看護への関心度は、「大変深まった」は10名、「深まった」は4名で、全員が「深まった」と回答した。「現地の状況を実際に見たり聞いたりしたことで授業の理解が深まり、とても興味を持つことができた」、「途上国での保健課題の改善をやりたい」との記述があった。

IV. おわりに

本学はインドネシア STIKES 大学と5年間

の歳月をかけてMOUを締結したことにより、両大学の関係性を築くことができた。また、MOU締結後に初めて学生の交流を、学術交流の視点を意識した研修という形で実施することができた。具体的には研修目標の明確化や、学生同士の各大学についてのプレゼンテーション、課題についてのディスカッションを行い、研修目標の充実化を図った。

研修では、5日間に5施設と2大学の視察とややハードなスケジュールであった。しかし、事前学習の成果もあり、学生は体調管理を行い大きな体調の崩れはなく、無事に研修に参加することができた。

今回の研修に参加した学生の中で、今後国際保健の分野で看護活動を検討している人もいた。病院等の施設視察を通して看護現場の見学や異文化に触れる研修目標の達成は、国際化が進んでいる時代に合った看護の視点を得られたのではないかと考える。一方で、学生に2大学でのプレゼンテーションやディスカッションを

行ってもらおう試みを行った結果、交流する場面の姿勢と異なり、積極的な発言や質問をすることができず、教員に頼る場面が多かった。今後プレゼンテーションにおける積極性を身につけることが課題であった。しかしながら、今回の研修を通して、看護を学ぶ同じ世代の学生同士の交流が、積極性を身につける動機づけになったのではないかと考える。今後インドネシア側の学生の受け入れや、看護教育の改革につながる教員同士の交流が期待される。

学生の研修目標に対する評価からは、今後はインドネシアにおける保健医療課題を吟味し、学生の学習レディネスに合った研修プログラムを検討し、次年度の研修に活かしたい。また、インドネシアにおける疾患構造の変化は、日本の保健課題と酷似している。このため、今後教員間の研究等を通して学術交流を発展させていくこともMOU締結後の取り組みとして挙げられる。